

中央电视台电视教育部用书

一九八六年

星期日日语

1

日曜日
の太のしい日本語

中央电视台电视教育部编

中国广播电视出版社出版

36

4/1



科工委学院802 2 0123135 3

中央电视台电视教育节目用书

星期日日语

日曜日のたのしい日本語

1986—1 (总13)

中央电视台电视教育部编

GF135/26



中国广播电视出版社

星 期 日 日 语

(86—1)

中央电视台电教部编

★

中国广播电视出版社出版

北 京 印 刷 一 厂 印 刷

新华书店北京发行所发行

★

787×1092毫米 32开 4印张 字数86(千)字

1986年2月第1版 1986年2月第一次印刷

印数：1—8,000册

统一书号：9236·056 定价：0.70元

目 录

- 1、七年目の再会（七年后的重逢）……………（1）
- 2、異常気象—大気の流れをめぐって
（異常気象—围绕大气流）……………（32）
- 3、朝の台所（早晨的厨房）……………（44）
- 4、超L S Iに挑む（向大规模集成电路挑战）…（75）
- 5、日本の海運（日本的大海运）……………（87）
- 6、語源のたのしみ（词源的探索）……………（97）
- 7、日本語教室：翻訳の技巧について（二）武吉次郎
（论口译的技巧）（二）……………（104）
- 8、おとぎのへや—こぎつねコンとこだぬきポン
（小狐狸啞和小貉呼）……………（110）

《星期日日语》每星期日下午三时起由中央电视台第一套
节目播送

七年目の再会

六助：社長，お帰んなさい。どうでした集金¹。

正直：なかなか，どこもかしこも²不景気でなあ，ぼやい³
てるよ。

.....

正直：六さん。

六助：はい。

正直：トモエ、どっかに出掛けてんのかい？

六助：奥さんは美容院ですよ。

正直：美容院？

六助：サブリナ⁴美容室！

正直：何だ，この忙しいのに美容院かい。

六助：違いますよ。美容院たって髪のセット⁵に行っ た ん
じゃないんですよ。

正直：ん？

六助：修理。スクーター⁶のエンジン⁷がね，調子が悪い ん
ですって。

正直：なんだ，仕事か。

六助：奥さんもたまにはなあ，美容院ぐらい行きゃいいん
ですよ。化粧すりゃ結構見られる顔⁸なんだから。

正直：化粧して仕事はできるか。

六助：それにしてもね，すれ違っても女と思う人は少ないんじゃないかな。

正直：誰が。

六助：えッ。

.....

京子：どう？ もう寿命なんじゃない⁹？

友恵：そんなことないよ。プラグ¹⁰系統の接触が悪かっただけだから，大丈夫。後一、二年乗れるよ。

京子：そう。ねえ，聞いた？ お宅の一平君とうちの晋太郎，教室じゃ相当の悪らしいわよ。

友恵：えーッ！

京子：あのね，エンピツをわざと折って削りに行ったりね，出もしないのに，お便所に行ったりする¹¹んだって。

友恵：ほんとう！

イネ：大分いい陽気¹²になったねえ。

京子：そうですね。

友恵：さ、これでよしと……，さあ，可愛子ちゃん、いい音だして泣くんだ¹³よ。

京子：あ，かかった。

友恵：ホイ，これで一丁あがり¹⁴。ありがとう。

京子：お茶飲んでいかない？

友恵：いいよ，まだ仕事があるから。

イネ：ねえ，あんたね，いつも感心して見てるんだよ。若いのによく働くって¹⁵ねえ。

友恵：そうですか。どうもどうも。

イネ：その気持忘れちゃいけないよ。地道にやってりゃ
ね、自然に信用というものがついてくるからね。

友恵：はア。ありがとう。

イネ：どうかね、そろそろ身をかため¹⁶た方がいいと思
うんだけど……。

友恵：は？

イネ：あんたみたいにね、真面目な職人は、悪い女にひっ
かからないうちにお嫁さんをもらった方がいいんじゃ
ないかね。

京子：いやだ、この人鈴木オートの奥さんよ。

イネ：奥さん？ あら、六さんじゃないの。あ、私、目が悪
くなっちゃってね……、めがねどうしたろうね、めが
ね。

京子：お婆ちゃん！ 箒、箒……。

…… …… ……

一平：ただいま。

六助：おい一平、今日学校で叱られなかったか。

一平：叱られないよ一だ。六さん、こんな所で寝ちゃだめ
じゃん。

六助：この野郎、あッ、いてェ¹⁸、あッ。

一平：あ、お母ちゃん帰ってきた。お母ちゃんお金お金。

トモエ：何よ、顔をみたたんにお金お金って¹⁹、ただい
まぐらい言えないの。

一平：ただいま。お金。

トモエ：また！

一平：だって²⁰本買っていいって約束したろ。

トモエ：いくら。

一平：三百八十円。

トモエ：はい。おつりをちゃんと持って、メンコ²¹なんか
買ったなら承知しないからね。

正直：お母ちゃん、ラーメンないか。腹へっちまった²²。

トモエ：あるでしょ……。

正直：どこだい？

トモエ：わかったよ、私が作るよ、六さん食べる？

六助：はい、いただきます。よし。

正直：今晚、スキヤキ²³でもやらん²⁴か。

トモエ：何よ、贅沢言って。今日は駄目よ、イワシ²⁵が山
ほど²⁶残ってんだから。

………

トモエ：またランドセル²⁷放りだして、まあ、父ちゃん²⁸、
たまには叱ってやって²⁹よ。私が言っただってちっとも
聞きゃしないんだから。

六助：きげん悪いですね。欲求不満じゃないですか。

正直：あッ、バカ。

六助：ね、社長、たまには何か買ってあげた³⁰らどうです。

正直：何かって何だ。

六助：何でもいいんですよ。靴でも、ネックレス³¹でも、ハ
ンカチでも……、そういうちょっとしたことで気持が
違うんですよ。

正直：お前はそんなこと心配しなくたっていいんだ。

六助：だって晩めしにも影響しますからね。

正直：えッ！

六助：そりゃ冗談ですけど、まあ、奥さんは毎日真黒にな
って働いてさ、たまにデパートへ行ったって自分のも
のなんか買ってきたことないじゃないですか。いつも
社長と一平君のものばかりし、奥さんの着てるのは
ね、スーパー³²の吊るし³³ですからね。

正直：やけに細かく見てるじゃないか。

六助：そらそうですよ、俺も年頃³⁴ですから将来に備えて
夫婦生活をひそかに研究させて貰ってる訳ですよ。で
もほんとに言ってお奥さんみたいな女はいませんからね。
……社長は幸せもんですよ、あんないい奥さんとこん
な働き者の従業員に恵まれてね。

正直：バカヤロ。

六助：あ、須藤さんの奥さん、こんにちは。

奥さん：こんにちは。

六助：ワ あー、すてきなコートですね。

奥さん：あら六さんって案外眼が高い³⁵のね。

六助：ヘッヘッヘ、旦那さんのプレゼント³⁶でしょう。

奥さん：フッフ、想像にまかせるわ。

六助：ああ、すばらしい、すばらしい。

正直：六さん。

六助：はいはい。

.....

佐藤：あ、あの……

トモエ：は？

佐藤：トモエさんじゃありませんか。

トモエ：（怪訝に）ええ、そうですけど……。

佐藤：やっぱりトモエさんだ……，どうも，久しぶり
……。

トモエ：あ，どうも……。

佐藤：ぼく，判りますか？

トモエ：ええ，それはもう……ほんとに御無沙汰して……。

佐藤：佐藤です。

トモエ：ええ，佐藤さんでしたね……！

トモエ：ハー，信夫さん？

佐藤：そうだよ……懐しいなァ。

トモエ：ええ……

佐藤：……ちっとも変ってないから，すぐトモエさんだっ
てわかったよ。

トモエ：ほんとに，どうも……。

佐藤：この近く。

トモエ：ええ，あの，……信夫さんいつ東京に。

佐藤：七年になるかな，今ね，友達と小さな出版社をやっ
てるんだ。

トモエ：そう。

佐藤：信用金庫³⁷時代の仲間と会う？

トモエ：会わない，全然

通る人：こんにちは。

トモエ：あ，こんにちは。

佐藤：どっか……お茶でも飲めればいいんだけど，実はこ
れから原稿を取りに行くところなんだ。この近くに大
学の先生がいてね……しかし残念だなァ……，ね，日
を改めてまた会おうよ。

トモエ： ええ……

佐藤： 明日会社に電話くれないかな，これ名刺。

トモエ： はい，二枚。

佐藤： それじゃぼくはこれで……きっとだよ、

トモエ： はい。

佐藤： 待ってるからね。

トモエ： ええ。あー。

………

正直： まっすぐ切るんだぞ。お前は簡単なんだ。お父ちゃんは難しい方をやってるんだからなあ。けどな，お父ちゃんも子供のころ幻灯が大好きでな，お菓子の箱があると幻灯機を作ったもんだ。ええ，内側に銀紙貼ってなあ，その銀紙だって，なかなか今みたいに簡単に手に入らないからな。お父ちゃんのお父ちゃんが吸ってた光³⁸って煙草の銀紙をとったもんだ。うん，ノリがつかなくてな，往生³⁹したぞ。

正直： けど，ボール⁴⁰紙じゃ所詮⁴¹もたないんだよな。電気はすぐ熱くなるだろう。箱がすぐゆがんじまう，なあ，そこでなあ，お父ちゃんは木で箱をこさえたもんなんだぞ。あッ，もうそんなに斜めに切っちゃだめじゃないか。

一平： どうする。

正直： どうするって，こら，笑ってる場合か。お母ちゃん，セロテープ⁴²ないか。

トモエ： な…なに。

一平： セロテープ。

トモエ：事務室の机の一番の引出し，上。

正直：何してんだい。

トモエ：ええ，ちょっと。

正直：お茶でも入れてくれないか。

トモエ：はい。

正直：ほーら切って、すこし切って、ここ切れたとこ。そうそう，その位，その位でいいよ。はい，切ってごらん，よしすぐはってごらん，もう一回ハサミで切ってごらん。まっすぐだぞ、まっすぐ！

.....

トモエ：ねえ，いる？

.....

トモエ：おはよう。

京子：あ，いらっしゃい。

トモエ：客で来た訳じゃないんだけどね。

京子：そんなこと判ってるわよ。あんたがセットするのは大晦日だけじゃない。

トモエ：（苦笑して）ちょっとさ相談したいことがあるの。

京子：上ったら。コーヒー飲む？

トモエ：うん。……ああバーゲンセール⁴³か。

京子：なァに，相談って。

トモエ：昨日ね，初恋の人にバツタリと会ったの。

京子：へえ。

トモエ：あ，友達なんだけどね、私の高校時代の。

京子：ふーん。

トモエ：十年ぶり位だったから彼女声かけられても誰だかわかんなかったらしいんだけど、彼の方は一目見て私，いや彼女だってわかったらしくてね。でも彼、忙しくてお茶を飲む時間もなかったもんだから，会社に電話くれるように名刺、渡してくれて別れたんだって。

京子：はい，コーヒー。

トモエ：ありがと。

京子：朝っぱら⁴⁴から面白い事聞かせてくれるじゃない。

それからどうしたの？

トモエ：それからって……あの，それだけなんだけど。

京子：それだけ？……じゃ相談って何。

トモエ：ん，だからあの，彼女は電話をすべきかどうか迷ってる訳よ。どう思うママ。

京子：（あっさりと）そりゃすればいいじゃないの。

トモエ：そう軽々しく言わないでよ。

京子：こういうことはね，むしろ軽々しく考えた方がいいんじゃない。

トモエ：でもよ，もし会うことになればさあ，懐しいだけじゃない、ほら気持がこもるでしょ……だから，さあ，ただ何となく会うだけでも，主人を裏切るっていうのかさ，そんなふうな気が……してね……って言うわけ彼女は。

京子：考えすぎよ。

トモエ：そうかね。

京子：そうよ。それでその彼と彼女って言うのは，なんな

の、その深い関係にあったってわけ？

トモエ：まさか……そうじゃないんだけどね、彼は彼女にプロポーズ⁴⁵までしたの。彼女の方も好きだったの。でも彼女の父親が反対してね。

京子：どうして。

トモエ：うん、彼女の家貧しかったのよ。だから、弟や妹が学校を出るまでは彼女の給料がないと暮していけなくてね。だから結婚がのびのびになって、そのうち彼が身体を悪くして田舎に帰ってしまったから、それっきり立ち消えになっちゃった訳。

京子：なさけないな。

トモエ：え？

京子：いや、彼女よ。本当に好きだったら何とでも方法があったでしょうに、病気治るまで待つとか、じゃなかったら彼の田舎まで行ってみるとか、私だったらそうするわ。

トモエ：そうなんだよね……でも、彼女はオクテ⁴⁶っていうのかなあ、消極的っていうのかなね、何が何でも結婚したいって気もしなかったし、ましてや、親の反対をおしきってまで結婚しようとも思わなかったんだよね……あーあ古いタイプ⁴⁷の女なんだよね。

京子：バカね。あんたそんな深刻になって考えたってしょうがないじゃない。

トモエ：そんな深刻になってた？ ハハ、そうか。

京子：とにかくね、一応電話してみなさいって言ったらどう。

トモエ：……でも、電話したら会うことになるよ、きっと。

京子：会ったら会ったっていいじゃないのよ、ただ懐しい
懐しいで終るか、それ以上発展してモノゴトになるかは彼女の責任じゃない。彼女の大人としての判断にまかせるべきよ。

トモエ：大人としての判断か……

京子：……あ、いらっしやいませ。

客：ねえ、ねえ、ママ聞いた、あの二人、別れちゃったんだって

京子：あら、やっぱり、私もね、おかしいと思っていたのよ。ほんと

…… …… ……

イネ：奥さん。

トモエ：あ、どうも、どうも。

イネ：引越っしはいつですかね？

トモエ：は？

イネ：聞きましたよ。御主人が大阪の方へ転勤だそうで、
がっかりね、折角顔馴染⁴⁸になったっていうのに、
さ。

トモエ：お婆ちゃん、それは岡田さんところでしょ。

イネ：え？……あ、鈴木オートさんかい。ごめんごめん。
私ね、近ごろ眼が悪くなっちゃってね、ごめん。

トモエ：もう……！ あーあ

かけるなって言うことなんだよな……。

…… …… ……

正直： トモエ。

トモエ： あら父ちゃん、何してんの、こんなとこで。

正直： え？ここは家じゃねえかよ。

トモエ： あ、そうだったね。

正直： どうかしたのか。

六助： くたばってるんじゃないですか。ここんとこ休みないから⁴⁹……

………

トモエ： あ、もしもし……あの、さ、佐藤信夫さんお願いします。あッ、信夫さん？……はい、トモエです……ごめんなさい、遅くなっちゃって……あ、こっち、ちょっとごめんなさいね。あ、そう、ずっと待っててくださったの、本当にごめんなさいね。ええ、はい。

………

トモエ： 父ちゃん。

正直： うん。

トモエ： 今度の日曜日、デパートに行きたいんだけど、夏物のバーゲンセールやってるのよ。気晴らし⁵⁰にちょっと行って見ようかなと思ってさ。

正直： いいとも、行って来いよ。

トモエ： それじゃちょっと行ってこようかな。

正直： どうせ行くんならパーマ⁵¹でもかけて行ったらどうだい。

トモエ： いいよ、パーマなんて。

正直： たまにはいいじゃないか、六さん言ってたよ。

トモエ： なんて。

正直：化粧すれば結構見られる顔だってさ。

トモエ：何よそれ。

正直：アハハハ，ハハ……

トモエ：ねえ、お茶でも入れようか。

正直：ん、あついのな。

トモエ：うん。

………

京子：鈴木さん。

トモエ：えッ！ あ，何か忘れた？

京子：違う違う。ね，聞いてもらいたいことがあるんだけど，ちょっとお店じゃなんだから，ちょっといい？

トモエ：うん，いいよ。

………

おじさん：ありがとうございました。

いらっしゃい。

京子：おじさん，おしるこ⁵²二つ。

おじさん：はい，おしるこ二つ。

トモエ：なァに，話って。

京子：どうした，例の友達。

トモエ：友達って。

京子：ほら，初恋の人に会った。

トモエ：ああ，あれね，電話するまではドキドキだったらしいんだけど，話してるうちに落ち着いてきて，赤坂⁵³の中華料理屋でお昼食べることになったらしい。

おじさん：お茶をどうぞ。

トモエ：あ，どうも。